

入選

小さな勇気、あたたかい世界

千葉県 市場小学校

五年 鈴木 琴葉

あせばむような、初夏のある日のこと。わたしは祖母の家へ遊びに行くために、駅から祖母といっしょに歩いていた。とちゅうには遊歩道があり、数メートルおきに、大きなこしかけられる石がおいてある。

遠くを見ると、重そうな荷物を持ったおばあさんがゆっくり歩いては石にすわり休み、また歩いては休んでいた。それを見て、（暑いのに大変そうだなあ）と思った。

しばらく歩いて、そのおばあさんに追いつくと、祖母はすぐに話しかけた。

「だいじょうぶですか。荷物持ちましょうか。」

するとおばあさんは、

「ありがとう。でも、休みながら行くから時間がかかるし、だいじょうぶよ。」と言った。

しかし祖母は、「いっしょに行きましょうよ。」と笑顔で言い、荷物を持ってあげた。

三人で歩いては休み、また歩いては少し休みながら帰った。祖母はその間おばあさんと話をしていたが、わたしははずかしくて、はじめはただついていだけだった。でも、おばあさんが話しかけてくれて、少しずつきんちょうがほぐれていった。

そして、祖母のかわりに荷物を持ってあげた。思っていたより重かったが、わたしが一番若いのでがんばった。何分か歩き、おばあさんが、

「ここを曲がったらすぐ家だから、ここでだいじょうぶよ。本当にありがとう。」

と何度も何度もお礼を言ってくれ、そこでお別れすることになった。

そして、そこから祖母と二人でまた数分歩き、祖母のマンションに着いた。そのときふと、後ろをふり返ってみると、おばあさんはまだ曲がり角に立ち、ニコニコ笑いながらおじぎをしていたのだ。わたしは、おばあさんがずっと見送っていてくれたことにびっくりしたと同時に、なんだかとてもいい気持ちになり、心がぼかぼかした。

ちょっとした行動で、相手がよろこんでくれ、自分もうれしくなれるなんて、とてもすてきなことだと思った。その日一日、幸せな気持ちで過ごせた。

ただ、ひとつだけ後かいがある。それは、祖母はすぐに声をかけたのに、わたしは勇気が出ず話しかけられなかったことだ。今思うと、祖母はいつも困っている人がいたら、放っておけないやさしい人で、そんけいする。わたしも祖母みたいに、すぐに行動に移せる人になりたい。心の中で思っているけど、行動に移さなければ何も変わらないからだ。

一人ひとりがもっている、ほんの小さなやさしい気持ちを行動に表すことで、たとえ一つひとつは小さくても、それが集まれば、とてもやさしくあたたかい世界になるのではないだろうか。

これからわたしは、もし困っている人がいたら、少しだけ勇気を出して話しかけてみようと思う。その小さな勇気で、やさしさであふれるあたたかい世界を作りたい。